

アンケート調査結果

1. 3月から5月まで3カ月にも及ぶ臨時休校措置、あらゆる公共施設の使用中止という「コロナ第一波」の事態が、葛飾区の子ども・子育てにどのような影響をもたらしたのか、委員の皆様からそれぞれの現場でのご経験をお聞きしたいと思います。

・民生委員として児童会館等でお手伝いをさせていただいておりましたが、コロナウイルス感染拡大により現在も活動中止中です。毎日のように母子で午前中に児童館に遊びに行っていた方が、自宅で子供と2人、最初は良かったが、だんだん子供も外へ出たがるわ泣くわでストレスに変わっていったと言っていました。低学年の子供を持つ母親もパートに行けず、不安を漏らしていた。普通に思っていた学校給食のありがたさが身に染みた等。また、子供たちもストレスを抱えるようになったとの事。

・こども食堂、学習支援、遊びのひろば等、あらゆる市民活動が一時停止を余儀なくされました。しかし、こども食堂はお弁当の宅配、学習支援のNPOはタブレットの無償貸し出し、ひきこもり支援のNPOは学童保育に入っていない子どものための居場所作りなど、感染防止に工夫しながら新たな活動が素早く立ち上がりました。そのような活動を通して見えたことは、突然の休校措置によって子育ての負担が家庭だけに倍増して押し寄せていたこと、その負担を経済的理由や自らの障がい等の事情により負いきれない養育者が精神的に非常に追い詰められていたこと、学校や公園などで友だちと遊ぶことができない子どももメンタル的に追い詰められ、子どもが荒れることで親もさらに疲弊してしまった・・・という苦しい状況でした。

行政による学校給食の代替措置がまったくとられなかったことも見過ごせません。一斉休校によって栄養摂取が困難となった子どもの数は、市民活動がカバーできる範囲ではなかったはず。一方、不登校の子どもにとっては思いがけず「家に引きこもっていて良い」時間が保障されたことによって、自分なりの生活のペースを取り戻し、分散登校が始まった6月からは1日も欠かさず登校しているという例もあります。不登校・引きこもりという状態を批判されなければ、子どもは自分で自尊心を取り戻す力を持っていることに気づかされました。

・コロナウイルス感染症に伴う臨時休校とマスク手洗いの徹底により、小児期の感染症は激減し、休日診療所の受診数 医療機関（小児科 耳鼻科への）受診は70%近く受診数が減少した。この事は、保育園等の休園にともない子供の密状態が解消され自宅での子育てが基本となるなかで、予防対策を徹底すると、子供たちの間で感染するウイルスは激減する事が示され、またマスクの徹底でアレルギー性鼻炎（花粉症）による受診も抑制された。保育園、学校という場所は、感染症を助長させる場所であり、その閉鎖は感染症を収束させる効果は明らかである。しかしながら、現状においてこれらの場所は閉鎖できない場所であり、感染症対策をほどこして、ウイルスとの共存の中で生活していく必要性が実証されたと考えている。

・学童保育クラブの立場から報告いたします。学校の休校に伴い基本的にはご家庭での保育をお願いしつつ、就労保障としての朝からの保育をほとんどの学童で実施しておりました。三密を防ぐために学校内の教室をお借りするなど様々な工夫と配慮をしながら過ごしておりました。また登所出来ない子供やお子さんとの密着した生活の中で大変な思いをしていらっしゃるご家庭に週一回お便りをお送りする、電話をかけてご家庭の様子を伺ったり、保護者の相談に乗ったりしている学童も

ありました。体をたくさん動かして育つ時期の子どもたちが、室内に閉じ込められた形で過ごした期間は、保護者の皆さんもとても大変な思いをしていらっしゃるようでした。親子ともにストレスが大きかったといえます。今後の親子関係に響かなければよいと願っています。

- ・ 保育園での報告もさせていただきます。在園しているご家庭でも年齢の小さい 0 歳児クラスなどは、今まで保育園を相談相手にしながら子育てと仕事の両立をしてきていたのに、コロナで子育ての支援者を失ったことが響いたご家庭がありました。園が見かねて登園を促したケースもいくつかありました。ご家庭内で切羽詰まったケースもあったと登園を再開した後に聞いたりもしました。また子ども支援センターから「虐待の通報があった」とお電話を頂くケースも増え、親子ともにストレスを抱えながらの生活を送っていたことが推測されます。

- ・ 障害のある子どもたちにとっては、この事態を理解する難しさはもとより、日常のリズムが崩れたことによる精神的な負担は大きかったと思います。保育園の登園自粛、幼稚園・学校などの休園や休校、児童発達支援事業所や放課後等デイサービス事業所の休業や利用自粛などで子どもたちの日常は一変しました。友だちと関わることもできず、保護者が公園に連れて行っても大好きな遊具が使用できない状態になるなど、つらい毎日であったと思います。子どもたちはこの状況を本当に良く辛抱したと思います。また、今回の緊急事態では、保護者（家族）の感染拡大防止への理解と協力があつたことは高く評価できると感じています。

障害のある子どもが家の中で大声を出したり走り回ったりすることで、近隣からの苦情があつて辛い、という保護者の声も聞かれました。無理に制止しようとすることで家庭内での虐待につながる心配もあり、電話で話すことで気持ちが楽になるようでしたので頻繁に連絡をとることの重要性を感じました。一方で、普段は子どもとじっくり向き合う時間が無かったが今回はその時間を持つことができた、というプラスの意見もありました。子どもの障害の状況にもよりますが、子どもたちにとっても負の経験ばかりでは無かったかもしれないと感じることもあります。

- ・ 児童養護施設の場合、①児童養護施設の子どもたちはなかなか外出出来ず、発達特性をもった児童はストレスが溜まって喧嘩などあり、大変だった。②上記に伴い、大人の職員の方も一日中子どもたちがいることで（いままでにない状況のため、新任職員は特に新しい仕事を覚えることと 24 時間子どもたちがいることに慣れないこともあり）対応が大変でしたが、どうかにかけてくれた。③ホームスタート（家庭訪問型子育て支援事業）は家庭訪問出来ず、困っている家庭があつた。④ショートステイ、トワイライトステイも縮小せざるを得ず、保護者にとっては早く開始してほしいというニーズも多くあつた。⑤音楽療法（地域向け）については延期をして、楽しみにしている保護者には時期をずらし待つてもらっていた。⑥全体的に、子どもたちは友達とも遊べず、同年齢の子どもとの関係性の構築の難しさや学習の遅れなどの可能性があり、今後の心配である。

- ・ 図書館なども使えず、公園遊具も使用禁止になり、公園などで体を動かしていると、「外に出るな」と理不尽に注意をされました。またマンションの階下、隣家からも子どもの音、声がうるさいと言われ、家族全員がストレスをためた。区民にもストレスがたまり、地域の子育てに対する理解に影響が出ているような気がします。

- ・ 今までは温かい目で見守ってくださっていた地域の方のご協力が得られ難いと感じています。例えば、例年に比べ、園バスの乗降時の保護者への苦情が多かったり、不審者を見かけたりと地域の方のストレス増によるピリピリ感が、園だけでなく、保護者の方の日常の子育てにも影響していると

感じています。

- ・ 普段から良好な家庭では、緊急事態宣言下でも 家庭内で健やかな育ち、親子関係をとれていたと聞いています。家族で過ごし（父親も）新たな発見や意義を感じながら“生活すること”を実感したとの報告もありました。
 - ・ 一方で、普段から家庭がうまく回っていない家族は、緊急事態宣言下で更に家族関係が悪化していたことが、最中、後の聞き取りで出てきていました。
 - ・ 保護者のストレスからか、夫婦喧嘩、虐待通報や、子ども総合センターへ悩みの相談などがありました。
 - ・ 子ども同士で元気に遊ぶことが出来ず、運動不足になっています。
 - ・ マスクの着用と熱中症対策の兼ね合いに課題が大きい。
 - ・ 季節の行事、特に卒園式・入園式が予定通り出来なかったことは、残念な限り。また、父の日・母の日・五月の節句等、幼稚園児にとっては印象深い大事な行事だが、実施できず、製作物もできない事は子どもの発育・発達にも影響があるのではないかと心配しています。
 - ・ 3密を避けるため、ソーシャルディスタンスの確保や、顔の表情が見えないマスクを着用しての保育は、しかたがない反面、集団のなかで人間関係を学んでいく幼児施設では、その目的の達成に非常に難しさを感じました。将来にわたって、影響があるのではないかと心配しています。
 - ・ 乳幼児にソーシャルディスタンスは理解できないため、3密の回避は困難です。
 - ・ 保護者の感染に対する危機意識が、それぞれ異なるので、その対応が大変困難です。とくに体調不良で登園するケースには、職員だけではなく、他の保護者からも不安の声が上がっています。
 - ・ 消毒作業が職員の大きな負担となっています。
 - ・ 職員には感染への心理的な不安が常にあります。
 - ・ あらためて日常の何気ない保育を、子どもの様子を、大切にしていこうと再確認しています。
 - ・ 子どもとの関係性や仲間作りにおいて、園での生活が大切であると改めて実感しています。
-
- ・ 交流の場が奪われ、集団活動・遊びの機会が持てなかった。
 - ・ 友達とふれあう機会が持てず、外出自粛など行動が制限されていたため気持ちを十分に発散することが出来なかった。子どもたちもストレスが溜まっている様子。
 - ・ リモートによる交流の場は多少あったが、相手の表情から状況を判断、推察し、気持ちを読み取り、相手の気持ちを感じとるのが難しく、直接のふれあいを通して得られる育ちの機会が失われていた。言葉よりも行動やふれあいを通してコミュニケーションをはかる乳幼児においては直接交流の場が持てないことは影響が大きいと思われる。
-
- ・ 学校の休校、また幼保の休園については仕方なかったと思います。
 - ・ 感染の不安があっても仕事をなかなか休めないという場合でも、休校という理由があることによって仕事を休めた方もいるのも事実だと思います。
 - ・ ただ、児童館や図書館、公園も一部遊具の使用中止については仕方ないとはいえ、子どもだけでなく高齢者の方なども含めて居場所がなかったので、しんどい思いをした親御さんは多かったのかなとも感じます。使用中止自体を非難したいわけではなく、そういった状況になったことで、発生するリスク（児童虐待など）対策をどのように実施したのか、それはどういった結果だったのか、きちんと確認していくべきだと思います。
 - ・ また、当初育休復帰期限が6月までに延長されましたが、さらに10月まで再延長していただいた

ことは、安心して育休延長できたので助かりました。

- ・ 今回のコロナの件で、さまざま価値観が変化していると思います。この時代の価値観、子育て対策にアップデートしていく良い機会だと感じています。
- ・ 個人的な思いとしては、経済をまわす意味でも、子どもを預けて働きに出るにあたり、保育園、そして保育士の方々には改めて、なくてはならない、尊い職業であると感じました。不安もある中、出勤してくれていた先生方もいたと思います。危険手当？を出すなど、保育士の方の社会的地位が上がるような対策もこれから取り組んでいってほしいです。
- ・ 歯科受診のコロナ感染リスクは高いのではないかとご心配されている方が多いと思いますが、歯科医師は常にマスク、手袋、ゴーグル、フェイスガードを着用しておりますので、飛沫感染や接触感染のリスクは高いわけではなく、口腔外バキューム等による院内エアロゾル対策をはじめ施設全体の感染予防対策をしております。免疫力を付けるために食事をしっかりとれるという事は重要ですし、虫歯や不衛生な口腔環境は肺炎のリスク増大に関与することが報告されています。どうかむやみに受診を控えずに必要な歯科診療を受けていただきたいと思います。つい先日校医をしている中学校へ歯科検診に行ってみりましたが、虫歯の治療や抜かなくてはいけない乳歯の抜歯をしないままにいる生徒さん、あるいは歯を磨いていない生徒さんが例年よりだいぶ増えていると感じました。保健所で行う1才児健診や3才児健診も中断しておりますので、小さなお子さん達の歯の健康は大丈夫か危惧しております。ぜひ家族で過ごす時間のとれるこの時期にお子様健康についても目を向けていただければと思います。
- ・ 私は、学童保育クラブに勤めています。3月からの学童の方では、学童に来てからは手洗い、うがいを毎日、マスクを徹底するようにしました。4月からは、臨時休校事態になり、兄弟、保護者で家で見られる児童に関しては学童も休所になりました、パートの私たちも自宅待機にしました。6月からは学校が始まり、登所には、体温、うがい、手洗いを徹底、学童では児童の密にならないように、机を2人、向かい合わないように、パートは遊具の消毒を徹底をして、子供たちに安全に遊んでもらいました。
- ・ 学校に子供が来ない、出かけることもできない、集団で活動が出来ないので、学校へも電話で連絡したり、訪問しても短時間で切り上げる形だったと思います。地区委員会もすべてが中止というところが多かったと思います。何かしてあげたいけど何が出来るかわからないという感じでした。私個人としては学童保育の現状もわかっていただいて適正な支援をしていただけたらと思うこともありました。

2. 予想されている「第2波」「第3波」に備えて、子ども・子育て支援事業をどう進めていくべきなのか、皆様のご意見を交わしたいと思います。

・第1波の時のような学校閉鎖、公共施設閉鎖はするべきではないと考えます。感染者が出た時の臨時休業、濃厚接触者の自宅待機等は仕方ないとしても、一律の施設閉鎖は弊害が大きすぎます。長期の休校措置に関して、「子どもの最善の利益」を最優先に考える当会議体に対して区から何の意見も求められなかったことも残念です。子ども子育て計画の実施に支障を及ぼす事態については、少なくとも子ども子育ての現場がどうなっているのか現状調査、意見聴取はすべきだと思います。第1波の教訓を生かし、第2波、3波においては子どもの学習権、最低限の文化的生活が脅かされないよう、区の責任ある施策遂行を望みます。

・保育園 幼稚園 学校という環境は、感染症と共存して生活しなければならない場所であり、現在の感染対策を徹底する事が第2波対策の根幹となります。行動面で大事な事は、体調不良時に保育園、学校等に無理に通わず、小児科を受診させる事であり、コロナを恐れるあまり受診抑制が起こっている現状はよろしくないと考えます。発熱等の場合1日は様子を見ても良いと考えますが、2-3日も受診を控え自宅等で経過を見る事は、小児科領域においては疾患の増悪の可能性が高く危険であると考えます。C o v i d 1 9では小児例での重症化はまれであり、周囲の大人（両親、教育現場のスタッフ）が十分な感染対策をとる事が極めて重要です。

・親子ともにホッと一息つける場所をどのように作っていきけるかが課題だと思います。公共の場や公園・図書館などが閉鎖に近い状態で、居場所が家庭しかないとなると、いろいろと心配なケースが出てきます。混み合わないよう調整を図り、ソーシャルディスタンスを守れるよう工夫しながらも子育て家庭を孤立させない取り組みが必要だと思います。コロナには勝っても子どもたちの心が育っていないということのない様、子ども同士のふれあいの場所も必要かと思えます。また配慮の必要な家庭の支援（食事の問題・学力の問題）も積極的に行う必要があると思えます。

・保育関係者の優先的・定期的なPCR検査体制の整備

「第1波」より少し安心できる点は、PCR検査などが比較的容易に受けられることであると思えます。保育や障害児支援にあたる職員は「感染させてはならない」という不安をいつも抱えていますので、医療従事者と同様に、優先的に定期的に検査ができる制度を作り、過度な心配や精神的な負担を少しでも取り除くことが必要であると思えます。

・家族が感染した場合の子どもの保育に関するガイドラインの策定

家族が（無症状の場合も含めて）検査で感染していることがわかった場合、子どもたちをどこどのように保育するのかということが明確であると保護者は安心できると思えます。ケースによって異なるのでまずは簡単なガイドラインのようなものがあると良いかと思えます。また可能なら、相談できる支援センターのような専門の窓口を設け、母子家庭、父子家庭などの家族の状況、子どもの障害など、いろいろなケースを想定しての支援や助言、選択肢の提示ができる方が常駐し、関係機関と緊密に連携する機能があると良いのではと思えます。

・虐待防止のための対策

「第1波」では子どもも保護者も先の状況が見えない中で日中長い時間を一緒に過ごし、さらに息抜きに出かける場所も無い状態が続きました。障害児の通所事業所は、子どもたちを含めて家庭の中で健康面、精神面で問題がないかどうかを確認しながら定期的な連絡をとりましたが、障害の有

無にかかわらず、関連機関は相談や申請を待つ姿勢では無く、積極的に連絡を取る方向が望ましいと考えます。

・利用制限を設けた公共機関の開所

休園・休校・自粛が続く場合、民間の施設や店舗などは閉めていても、逆に公立の図書館や児童館などは人数や時間について利用制限を設けた上で徹底した感染対策の元に一部開所しても良いのではないかと思います。民間より感染防止対策徹底の指導は届きやすいと思いますし、利益が優先される訳ではないので、密を防いでたとえ少しの時間でも親子で安心して過ごせる場があれば、必要な方には支援が届くと思います。

・児童養護施設の場合、①今後感染者が出たときの対応についてどうしたらよいのか、限界があると思います。ZOOMで会議、研修、採用試験など可能なものもありますが、子育て支援に関しては上記と同じ心配があり、特に地域支援については（ホームスタートとショートステイ、音楽療法など）延期や中止しかないと考えます。大きな施設のため、クラスター等あつては困るため、注意しながらどうにかしている状況です。②法人内には保育園、学童等がありますが、三密にならないように工夫しているようですが、感染経路不明も増加しており、限界を感じます。③地域支援に関しては、状況に応じて臨機応変にここ数年はその時々話し合いをしながら、随時対応するしかないと思います。

・子育て世帯に感染者が出た場合のシミュレーションを提示する必要があると思います。両親が感染した場合、残された子どもへの対応や、子どもが感染した場合、子どもが隔離されてしまうのかなど、前もって具体的なケースを紹介できると混乱が少ないと考えます。

・公・私立の幼稚園・保育所は出来れば同一歩調で対応策を取ればよいと思う。

・5歳児を中心に、今回の危機を子どもの視点でも共有し、園生活を一緒に考え、共に準備する生活へ、新たな生活や保育を作り出す柔軟な発想を子どもたちと共有していくこと。

・消毒の徹底（そのための人員が課題）

・分散でもよいから登園するなど、子ども同士の交流は大事にするべき。

・施設の負担増や減収への施策、職員への手当など、現場へのフォローが必要と考えます。

・子育てひろばなど、在園児・保護者以外の園内への立ち入りが、感染リスクの観点から課題が多い。

・少人数でも良いので、安心・安全な交流の場を設けること。（交流の場の確保）

・家庭で親子のふれあいが持てるような活動を提供すること。（情報提供）

・Zoomなどパソコンを使ったりリモートによる活動。

・パソコンなどの環境のない家庭では電話や訪問による相談・活動提供をする。

・孤立を避け、居場所（相談の場）をつくり、支援の手が届くようにする。

・教育のIT化を強く進めたいと感じました。子どもの集団教育、オフラインでの学びは重要だと感じてはいますが、やはり今後はよりITとは切っても切れない社会になっていくと思うので、幼少期から慣れていくべきだと思います。常時よりオンライン授業でのフォローや少人数制の授業により、教育の質を高めてほしいです。

・授業だけではなく、学校からのプリント配布や保育園の連絡帳などもIT化を進めることで紙資源の削減、教員の業務効率化、親と教員のリアルタイムで密接な関係性構築など、アナログの良さも

ありますがデジタルだからこそできるコミュニケーションを図ってほしいです。IT化においては、PCのウイルス対策も万全に行っていてほしいです。

- ・今までこの会議では主に待機児童の数を減らすことに注視してきたように思うのですが、小さな赤ちゃんがいつもそばにいて欲しいと最も望んでいるのは母親と父親なので、小さなお子さんを持つ両親が必死に働かなくても、家族が幸せに暮らせるような支援の仕組みや設備について子供たちの目線に立って考えていけたらいいのではないかと思います。
- ・学童は37名の児童がいます。お部屋も2部屋しかなく児童が勉強、遊ぶには狭く、公園もいけない。児童はかなりストレスが溜まっています。その中で児童は頑張っています。「第2波、第3波」にならないように、先生、パートの大人達が常に一言一言児童に伝えないといけないと思います。
- ・私にはよくわかりませんが、とりあえず、自分がかからないように手洗い・うがい・顔洗いを欠かさないようにしています。そして、出かけるときは熱を測る。その上で求められることを精一杯やっていくしかないのではないのでしょうか。
私個人の意見としましては、学校が長期休校になった時の学童保育への支援ももう少し考えていただけたらと思いました。

3. 子ども支援の現場で、感染拡大防止の観点から工夫した点などがありましたら、お書きください。

- ・学校が始まり、児童見守りパトロールも始めました。以前は近くに寄って話をしたり、注意をしていましたが、離れて声かけをしています。
- ・こども食堂は非常事態宣言期間中は中止しましたが、2月までと、6月からは会食は避けてお弁当持ち帰りとし、少人数での学習支援、ソーシャル・ディスタンスをとりながら遊び、特に困窮家庭の子どもたちのストレス発散、養育者の心のケアを意識して開催しました。
遊びは外遊びが理想ですが、室内でしかできない場合は消毒・換気に注意し、適度に体を動かしながらあまり興奮しないようなゲームを考えました。フルーツバスケット、ジェスチャーゲームなど。
- ・現状対策における手洗い、マスクは、コロナ禍における対策として必要かつ十分であると思われる。具体的には、来園時登校時の手洗い、遊び終了後の手洗いの徹底は必要であるが、だからといって遊びのなかでの密になることを過剰に神経質なる必要はないと思われる。外遊びをやめる、子供同士手をつながせないなどの指導は行き過ぎであると考え、接触の前（登校登園時）と後に手洗い、アルコール消毒等の徹底を行えばよいと考える。保育園内での園児のマスクは、ほぼ不要と考える、特に2歳以下は装着すると熱中症等の危険があり望ましくない。保育スタッフ、保護者が来園する際は、マスクは必要である。この根拠は、これまでの小児感染例のほとんどが、大人からの感染による発症であり小児例が原因になる可能性が低いからである。
- ・徹底した保育環境消毒、丁寧な清掃、子どもたちの健康状態把握、体調管理、三密を防ぐための距離提示、学校施設借用による保育環境拡大、飛沫防止のためのテーブルフェンス設置、共有食器の

廃止、衛生習慣の定着化（うがい・手洗いの徹底・マスクの着用）。

- ・健康チェックの際、体調が悪い家族がいないかどうか確認。
- ・通所によるグループ活動の密を避けるために、Zoom や公式 Line による折り紙遊び、手遊び、体操などの配信。（児童発達支援事業所）
- ・子どもたちの密を避けるため、部屋を分散しての活動。（放課後等デイサービス事業所）
- ・送迎車内の密と長時間の乗車を避けるため、送迎可能な保護者にはお迎えを依頼。（放課後等デイサービス事業所）

- ・児童養護施設のため、①外部からの訪問者（見学、採用試験、ボランティア、保護者など）については、延期、健康チェックをして少しずつ実施。②子どもたちへコロナに関する周知と外出の制限、換気やマスク着用等。③Zoom で会議やお楽しみ会などを開催。④都などからの要請や資料等を現場へ周知と看護師中心に感染予防対策を行った。

- ・昼食のために段ボールでテーブルの区切りを作成してみました。
※このほか、アクリルボード、クリアファイル+ブックエンドなど。
- ・手指消毒、遊具他園舎内・バス内等の拭き消毒の徹底。
- ・給食は、クラスを分散して前向きで食事をするとも行っています。
- ・室内ではマスク着用、外遊びではマスクを外す。
- ・あらゆる行事を安易に中止するのではなく、なんとか密にならないで開催できる形式はないかと検討しています。
- ・鍵盤ハーモニカ使用を中止にし、クラス人数分の木琴を購入し、音楽活動を行っています。
- ・プール保育を中止にし、水遊び遊具を買い揃えました。
- ・換気を十分に行いながらエアコンを最大にして使用している。そのため暑い日は室温を保つのが困難なのと電気代が大幅に上がっています。
- ・園医と相談して、保護者向けに登園マニュアルを作成しました。
- ・行事などは、園全体や、学年単位で行っていたものをクラス単位に切り替えて密を防ぎつつ行う。
- ・3台の園バスをフル活用し、1クラスを3台に分乗（1台10名程度）して密を避け、できる限り園外保育を実施します。
- ・ユーチューブなどを活用し、自粛中は1日2回（8時、13時）ほど、絵本や紙芝居の読み聞かせ、本来歌うはずであった月（季節）の歌、製作、踊りや体操など、職員による動画配信を行い、生活リズムが乱れないように、また園生活が身近に感じられるように、そして親子で過ごす時間をより豊かにするように努めました。結果、家庭内のストレスの低減につながったと考えます。
- ・フェイスブックなどで、子育てや幼児教育について配信し、家庭の教育保育力の向上に努めました。
- ・いくつものマニュアルの作成と共有、実際に活用、持続させるための検討やアイデアを生む雰囲気作り。
- ・保護者に対する説明や現状の報告など大切にしました。
- ・少人数活動や個人的に一人の子どもに合わせた指導や説明がより大切となった。
- ・保護者の方々の感染防止に対する感覚や意識を知ることが大切にした。
- ・子どもと考え準備していくことにより、子ども自身に意識が出てきて本当の意味で“身に付ける”となったように感じている。

- ・健康・体調管理（検温）を家庭にお願いする。
 - ・入室時に体温確認、消毒。
 - ・換気に留意し、間隔をあけ活動。活動人数の制限、時間を短くする。
 - ・大人はマスク着用。子どもは活動中はマスクを着用しなくて良いことを伝える。
 - ・活動場所の消毒、衛生管理。
 - ・水道は間隔を空けて使用。（3つ並んだ蛇口の真ん中は使用しない）
 - ・トイレは間隔をあけて、待つラインを引く。
-
- ・家庭では、帰宅後の手洗いうがい、アルコールジェルでの消毒。
外出時のマスク着用、公園での飲食は控える、など。
 - ・念のため…保育園では、3歳児以上の児童のマスク着用、給食時のついたて使用、登園時にクラス別で使用玄関を分ける等行っているようです。
-
- ・もっと、皆さんが今の状況を理解しないとイケません。新型コロナウイルスに感染したら、どうなるか？各自が責任を持たないとイケない。児童には、体温、手洗い、うがい、密にならないように自分達で気を付けないとイケないです。
-
- ・定例会の時は、ドアを開けて椅子の間隔もできる限りあけるようにしました。
応援団活動では、密になるような作業は一人でやるようにしたり、熱中予防の飲料も手渡しせずに置いたものを取ってもらうようにしました。